
カルミナ帝国大戦記

黒之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カルミナ帝国大戦記

【Nコード】

N7743A

【作者名】

黒之

【あらすじ】

祖国を奪われた幼い皇子エアリーズと、それを助けた皇族親衛隊のレオン。彼らは友好国クラウスの力を借り、祖国を取り戻すために戦いを挑む。戦争ファンタジーものです。戦争なので四肢を欠くなど多少の暴力シーンやグロテスクな描写があるのでお気を付けください。

第一章：逃走

暗く細く、険しい獣道。

その道を、何頭かの騎馬が駆け抜ける。

それは騎士達であつた。

しかし、その体裁には騎士たる者の誇りが感じられない。いや、感じられないのではない、押し殺しているのだ。

堪え忍ばなければならない、落ちた皇家を再興するには、今は皇子を連れ、逃げ延びねばならない、と。

不意に、先頭の若い騎士の前面から、叫び声が聞こえた。馬を止め、そつと耳を澄ます。

「いいか！ 敵はこの道を通るはずだ！ 此処を通してしまえば我らの勝利は無い。不審者を発見したら、全力で捕縛せよ！ 場合によっては殺しても構わん！」

「くっ、此処にまで先回りされるとは……」
若い騎士が至極無念そうに吐き捨てる。

一人の騎士が口を開く。

「…俺が囷になる。奴らを出来るだけ遠くに引き付けるから、その隙に進め」

若く（と言ってもこの一団では年長者だが）はつきりとした黒い光を持つ瞳、銀色の髪に、引き締まった体躯。かなりの手練であることは間違いないかった。

第二章：使命と笑顔。そして泪。

「レオン隊長！ それはなりません、囃なら我らが！ 我らは手傷を負い、皇子を守り切る自信はありません。さらに隊長には皇子を無事にクラウスに送り届けると言う使命があるはずです」

若い騎士が微かな怒気を含み言う。此処での囃は正に命懸けである。行なったが最後、決して生きて還ることはないだろう。

皇子には強い騎士が必要なのだ。皇子をその身一つで守り切れるのは、隊長であるレオンだけだ。

さらに若い騎士達は各々傷を負っている。足を引っ張る事はあっても、役になど立ちそうもない。

その状況で、我らを生かしてどうなるのか。

満足に戦闘も出来ない我らが、無事にクラウス国迄辿り着けるとは思えない。

そう若き騎士は言いたげだった。

「しかし……いや、そうか、済まないな……」

悲痛な面持ちで、レオンは若い騎士達に詫びた。

「何を詫びる必要があるのです。我らは皇子をお守りするために命を捨てると、騎士になった時から誓っていた身。今こそこの誓いを果たせる時、これ程の幸せがありましようか？」

若い騎士は微笑みながら言った。命を懸けた者だけが得られる、最高の笑み。

他の騎士達もそうだと云わんばかりに頷く。

「そうだな、皇子の為に死ぬ事、それが我らの本望。囃の役、君たちに任せた。しかし隊長命令だ。必ず、必ず生き延びろ。死ぬ事は許さん！ 例え手足が無くなろうと、目が見えなくなろうと、必ず生

き延びて俺に、皇子に会いにこい」

涙を流し、最後の命令を下す。

その言葉に、その場にいる騎士全員が泣いた。

「……有り難き幸せ……。了解しました！必ず…生きて…還ります
！」

涙を流しつつ敬礼。それが最後であった

第三章：若き命

「よし、それでは回復魔法を使えるもの、剣を振るえるものはこっちへ。残りは囃役を任せる。しかし、俺と同じ部隊に入れたからといって、生き残れるとは思うなよ？ 死のリスクはどちらも同じだ」

軽傷で済んだもの、魔法を使えるものとかかなりの傷を負っているものとは分ける。五騎と六騎の半分に別れた。互いに互いの無事を祈り、涙を流す。

「隊長」

囃役の若い騎士が言う。

「なんだ？」

「隊長の予備の鎧と、皇子のお召物を一式譲って頂きたいのですが」
「なるほど、そうか」

「はい、僭越ながら私が隊長に成り済まし、大多数の追っ手を引き付けたいと思います」

「危険が増すがそれでも良いのか？」

「元より覚悟の上です」

そう言って若い騎士は、レオンの鎧を受け取り、それを身に付けた。自分の麻袋には、未だ幼い皇子エアリーズの衣服を被せる。

そして……

時が来た。

囃役の騎士達が、関守の前に駆け出し、止まる。

「く、此処まで封鎖されたか。仕方ない、他のルートを探すぞ！」
若い騎士が言う。

「貴様等、カルミナの者だな！？」

関守が怒鳴る。

カンカンカンカン。

鐘を鳴らす。それを合図に、多数の騎馬兵が姿を現す。その数実に三十。

絶望的な数だ。追い付かれたら最後、死は免れない。若い騎士達は背を向け馬を駆る。

「一人は皇族護衛隊長のレオンだ！逃がすな、必ず捕らえろ！」その号令と共に、関守を除く騎馬兵全員が駆け出す。

瞬く間に駆け抜け、数秒後には姿さえ見えなくなった。

「馬鹿め、たかだか六騎で我らの追撃を逃れられるとでも思ったか！」

嘲笑気味に関守が吐き捨てる。

「しかしどうも気になる。報告では本隊が逃したのは十一騎の筈。いくら手傷を負ったとて道半ばにして倒れるような兵ではないような……」

考え込む関守。

その答えが出た時、関守の首は胴から斬り離されていた。

「そうだ、我らを無事に進めるため、自ら囿になったのだ！」怒りを込めてレオンが言う。

「今だ！全力で駆けよ！」

応。と小さな声で応え、正に全身全霊を賭け、走り抜ける。

第四章：犠牲の果てに

早く、速く、疾く、駿く。

後ろから、地響きの如く迫る轟音。

振り返ると三十もの騎馬が、其処には居た。

その兵達の手や馬の首には若い騎士達の首は無かった。

どうやら無事に逃げ切れた様だ。

大方取り逃がし、死んだ関守を見て囧だったと気付いたのだろう。
騎兵達の顔には焦りの色が見えていた。

しかし、こちらのダメージも大きい。

なにしろ負った傷もろくに手当てせずカルミナから此処まで逃げてきたのだ。

徐々に、レオンともう一人以外の騎士達が離されていく。

そして、逃げ切ることは不可能と悟った三人の騎士は、

「隊長！我らはこれまでのようです。これ以上付いていっても最早足手纏い。故に奴らを

道連れにして参ります！」

悲しき叫びを上げた。

それに気付き、後ろを振り返るレオン。

しかし、三人の姿は無く、只遙か後方から戦人の叫び声が聞こえるだけであった。

「く、グレイ！ウィリー！ジャン！」

手綱を握り締め、馬をかえそうとするレオン。
だが

「お止め下さい兄上！皇子の為に死すのが我らの使命の筈。彼らは

その使命を果たした迄

！今戻ろうと意味は在りません！　今は彼らの為にもクラウドに辿り着くこと！違いますか！？」

彼の妹、クリスが嗜める。

「くそう！俺にもっと力が有れば…！」

「今は耐えるのです。そして信じましょう！彼らが生き延び、私たちの前に現れることを

」

紅い唇から紡がれる言葉は、レオンを落ち着かせるのに十分な効果を出した。

レオンがクリスの方を向く。

その整った顔立ちからは、「助けに行きたい」と言う人間としての感情と「騎士の誇りである

」と言う騎士としての理性の葛藤が見て取れた。

そうだ。つらいのは自分だけではない。

いつもの自分ならそう思えただろう。

しかし今は、何人もの命を犠牲にしても、皇子をクラウドに送り届けなければ。

今はそれだけを心に、馬を奔らせる。

第五章：休息と戦い

どれ程奔ったのだろうか？

暗く険しい道を抜け、月が照らす平原へと出てきた。

其処にクラウドス国に繋がる道が続いている。

「兄上。漸く、森を抜ける事が出来ましたね」

クリスが息を切らしながら言う。

「うむ。皇子が疲れている様だ、此処で少し皇子と共に休め」

クリスの胸に抱かれた幼い皇子は、疲れ故にすやすやと寝息を立てていた。

「しかし兄上、一刻も早くクラウドスに向かわなければ」

「いや、休め。俺は番に就く。森の中に入っていれば見つかることもあるまい。三時間ほどしたら行くぞ」

嗜める様な強い口調で言う。

渋々クリスは従い、皇子と共に森の中で眠りに就いたのであった。

妹と皇子が完全に眠りに就いたのを確認すると、レオンは鎧兜を身に着け、剣を持つ。

「：行くか」

馬に乗り、森の中に駆けて行く。

森の中の、開けた場所に出てきた。

馬を止め、瞑想をする。

やがて何処からか声が聞こえてきた。

——このあたりを探せ！！ 未だこの森の中を迷っているかも知れぬ！！

：思ったとおりだ。そう思いながら、鞘から剣を抜き放つ。

皇族親衛隊に召し上げられたときに皇帝陛下から賜った宝剣である。豪華な装飾が施されているが、切れ味鋭く、大木を一撃で切り倒すほどである。

そしてもう一本、長剣が。

この長剣は、皇子が皇帝に即位するとき、前皇帝から譲り受けるものだ。

過度な装飾は無く、ただ柄の尻に青く輝く宝石が埋め込まれているだけである。

その質素さが、逆に剣本来の美しさを醸し出している様だった。その長剣を背負い、盾を持ちつつ声のした方へ馬を向かわせる。

第六章…交差する思惑

未だ日が照らさぬ暗い森の中、セスカ聖教国の兵士達はカルミナ帝国を落ち延びた騎士達と、第三皇子エアリーズの探索が続けていた。

強大な影響力を持つカルミナ帝国の皇子を生かしておいてはならない。

皇子が生き延びれば、必ずカルミナの残党や東側諸国が皇子を旗印に反旗を翻すに違いない。

そう考えたセスカ軍は、皇子討伐の為約六百の大軍を編成。二十に部隊を分け、東側の国境付近を封鎖、探索していた。

先程までレオン達を追い、若き騎士達に足止めをされたセスカ兵達は、レオン達を目前で取り逃がしたと言う事実に焦りついていた。

「早く彼奴らを見つけんかあ！ このまま彼奴らを逃しては只ではおかぬぞ！」

一際豪華な鎧を身に付けた指揮官らしき男が、額に青筋を浮かべながら怒鳴る。

そんな中、一人の兵士があるものを発見した。

「隊長！ あちらにこんな物が」

そう言いながら、拾った物を指揮官の目の前に置く。

「これは！ 皇族親衛隊の隊長どもが被る兜ではないか！」

指揮官の目の前に置かれたのは、白銀に輝く兜であった。

「未だこの辺りに潜んでいるやもしれぬ。者ども、十二分にこの辺りを探せ！」

「は！」

三十近くの兵士達が声を揃え応答し、探索を再開した。周囲を探索していた兵士の一人は、目の前にネックレスが落ちているのを

みた。

そのネックレスを拾い上げると、銀で出来た鎖に、ルビーが埋め込まれた端目から見てもかなり高価なものであると思えた。

「へへ、こんな良いものを誰にも渡しちゃいけないわな」

そう呟きつつ、兵士はそれを胸に仕舞い込もうとした。

その時であった。

彼の頭上から、大きな影が落下してきた。

「へ？」

兵士は上から落ちてきた影の正体を確認することも出来ずに、影が繰り出した剣に脳天を貫かれ、絶命した。

ドサッ、と何かが倒れるような音を耳にした兵士はそこに集まる。

そして、その影の正体を確認したとき、彼らの顔からは焦りの色が消え、代わりに下衆な笑いが浮かんでいた。

第七章：邂逅

「ほう、そちらからわざわざ現れてくれるとは。貴君がレオン・アレストロードだな？」

下衆な笑いを浮かべたまま、指揮官は男に問いかける。

「そうだ」

レオンは剣を構えながら、指揮官に答える。

「ふむ、では質問しよう。貴君の主人であるエアリーズ皇子はどこかな？」

「答えるわけがなからう？」

表情は崩さず、剣を構えたままだ。

「まあ、そう答えるであろうな。おい！ 其処の三人で、クラウドス近くを探して来い！ 皇子にはまだ護衛がついているかも知れぬ。気を締めて掛かれよ」

「了解しました」

三人の兵士は答え、クラウドス方面へ姿を消して行く。

レオンはその場から動かず、現在の状況を確認する。

――：剣兵と斧兵が五人ずつ、槍兵が四人に弓兵三人か。厄介だな――。

「おや？あの三人を追い掛けずとも良いのかな？」

わざとらしく聞く指揮官。その挑発には乗らず、冷静にことばを返した。

「今皇子についている護衛は俺に引けを取らず強いからな。他人の心配より自分の心配をしたらどうだ？」

……一番厄介な弓兵までは十歩か。少し遠いな。

弓矢等投擲による攻撃で敵の動きを牽制し、その隙を剣や斧や槍で討つ。

兵法の初歩の初歩であるが、これを蔑ろにする指揮官はこの大陸

には居ないであろう。

何故ならその効果は単純ながら絶大だからである。

それ故にこの様な白兵戦では、弓兵を狙うのが定石なのだ。

しかし、援護に特化した性質上、弓兵は全く前線に出てくる事が無い。

従ってこの場合は、多少のダメージを覚悟に突撃をするか、煙幕の様なもので目眩ましをすれば良い。

「……雷聖ルート。今その名を借りて雷の精に命ずる」

片手に剣を構えたまま、もう片方の手で空中に陣を描く。

「雷の精よ、今我が眼前に立ち塞がりし者達に、汝等の光を炸裂させよ！」

人差し指を兵士達に向け、言霊を紡ぐ。

レオンの前に、白色に光る球体が現れ、兵士達の元へ漂う。

「散！」

第八章：窮地

レオンの言霊と同時に、光の球が弾ける。
途端、白い閃光が森の中を駆け抜けた。

「ぐあっ！ 目が！」

閃光に視界を奪われ、立ち尽くすセスカ兵たち。
その隙を逃さずに、弓兵の元へ駆けつけるレオン。

一人、二人、三人。

目にも留まらぬ剣さばきで弓兵達を切り捨てた。

「おおおお！」

振り向きざまに気合いと共に繰り出した一撃は、槍兵の持つ盾をも切り裂き、その体を腹を境に真っ二つにした。

視力が漸く戻った兵士達は、斧兵を前面に陣を組み、四方からレオンを追い詰める。

斧を扱う者は、その斧の重量故に振り下ろしか風ぎ払いの攻撃しか出来ない。

その為、攻撃までの隙を埋めるべく、重厚な鎧と盾を身に付けるのである。

鎧を纏ったその体躯は、どんな攻撃にも動じない重さと硬さを手に入れる。

その鉄壁の守りを打ち崩せるのは、その体を覆う鎧の僅かな隙間を貫き通す細剣や、力を一点に集中させた馬上槍の一撃、鎧ごと人体を叩き壊すハンマーぐらいしか無いだろう。

今レオンは、その手段のどれも持ち合わせていない。

皇帝から賜った一振りの剣のみである。

この剣とレオンの技量ならば、或いはその鉄壁を切り崩すことが出来るかも知れない。

しかし、木々が乱立する森の中に多対一。

圧倒的不利のこの状況で、鎧を切り裂く事など不可能であった。

斧兵特有の、巨大な体躯から繰り出される必殺必至の連撃と、その間を縫うようにして突き出される剣士の攻撃。

その総てを紙一重に躲すが、如何せん反撃の糸口が掴めない。

斧兵の一撃に討たれるのは時間の問題であった。

第八章外伝：女騎士の危機（前書き）

クリスとエアリーズに迫った危機の話です。
多少の性描写があるのでお気を付けください。

第八章外伝…女騎士の危機

微かに漂う松明の油の匂い。

鉄同士が擦れて聞こえる不快な音。

…追っ手？

静寂な森からは有り得ない気配を感じ、クリスは目を醒ます。

直ぐに愛用の短剣をとり、草叢の中に身を屈める。

三人の追っ手はこちらにはまだ気付いていない様だ。

「あそこに馬が繋いであるぞ！」

大木に繋がれていた馬のもとへ駆け寄る。

「近くで休息を取っているやもしれん、近くを探すぞ」

「隙を突いて馬に乗るかも知れないな。可哀想だが死んでもらうぞ」

兵士の一人が、馬の首に短剣を突き刺す。

短く小さいいなきの後、大きな音を立ててその場に倒れる。

クリスは慌てて皇子の方を見るが、深い眠りに就いている様で、

静かに寝息を立てていた。

…剣士二人と斧兵か。剣二人なら何とかなるけど…。…斧兵が

先ね…

草叢の中に身を隠しつつ、音を立てずに斧兵の背後へ忍び寄り、

その刃を突き立てる。

が。

「後ろだ！」

剣士が叫ぶ。

その声を聞いて、斧兵は身を振った。

「ぐおっ」

「くっ、外した！」

背中越しの心臓への狙いは外れ、斧兵の脇腹へと突き刺さった。

「ぬうん！」

脇腹に突き刺さった短剣を引き抜く。

刹那に無防備になったクリスの腹へ、力の込められた拳が叩き込まれる。

「くうっ」

体中の空気が外に絞り出され、数瞬呼吸が止まった。

斧兵はクリスの両手首を掴み、強引に大木の幹に打ち付ける。

両手からぶらさがる形で身動きを封じられた。

兵士達の顔に宿る、下卑た笑み。

「お嬢ちゃんの割には良い体してるじゃねえか。俺の脇腹傷つけた代償、その体で払ってもらおうか？」

兵士達の視線がクリスの肢体に集中する。

歳を経て成熟した女性と、未だ成長途中の少女の半ばのようなクリスの体は、クリスの整った美しい顔と相まって、男たちを欲の獣に墮とすには十分過ぎる魅力を放っていた。

……最早これまで。

女性騎士の間には、敵にその身を囚われた時、自害するという鉄の掟が存在する。

男たちにその身を辱められない様にする為だ。

死んでしまった者と交わると言う事は、この大陸では百刑に値するため、死してしまえばその身体を辱められる事は無い。

舌を噛み自害しようとするクリスであったが、男の空いたほうの手に顎を抑えつけられ、口を開くこともできなくなってしまった。

「おっと、まだ死ぬんじゃねえぜ。お楽しみを逃すかってんだ」

「そうそう。今死んでみる？直ぐにこの皇子様もそっちに送るぜ？」
そう吐き捨てる剣兵の足元には、泣きながらクリスを見つめるエアリーズの姿があった。何という屈辱であろうか。幼い主の前で三人の男に嘲られるとは。

男は軽い金属で出来た胸当てを剥ぎ取り、先程の短剣をクリスの

胸元に突き付ける。

「大人しくしてろよ。俺たちが優しくしてやるからよ」

男の手に持たれた短剣が、自らの持ち主の服を切り裂く。

もう駄目だ。露になった自分の胸元を見てそう思ったクリスは、絶望感や己に対する怒りに、目を閉じる。

その時、視界の隅に一条の光が閃いた。

その光の正体を確認したとき、クリスは男の手首から離れ、その場に座り込んだ。

否、〈男の手首ごと〉離れたのだ。

「うわあああああ！ 手がああ！」

掌があるはずの手首から噴出す血を見て、男は叫ぶ。

男の体と手首を切り離れた物の正体は、一本の矢であった。

しかし、その矢の大きさは通常のそれとは遥かに異なる。

小槍の穂先ほどもある鏃に、通常の三倍はある太さのシャフト。

普通の弓では引けない、明らかに個人の為の、特注の物であることが見て取れた。

そして、クリスはこの矢を扱う人間を知っている。

「おうおうおう、上等じゃねえか。俺の恩人の妹に手を掛けようたあなあ？」

巨大な、正に巨人が引く物であるかと思えるような弓を構えたまま、矢を放った男が言う。

「キンカラ殿！」

自由になった口を開き、その男の名を呼ぶ。

「すまねえなクリス嬢。もう一寸早く駆け付けける積りだったが…。

一寸待ってな！ 俺らがそいつ等片すからよ！」

キンカラ、と呼ばれた男の後ろには、剣と宝玉を携えた二人の女性の姿が。

「大丈夫ですか？ クリス様！」

剣を構えた、未だ若い、凜とした長い黒髪が特徴的な十四、五位の少女が叫ぶ。

「許せないわね。あのような男達は千刑に値するわ」

宝玉を構えた、成熟した雰囲気放つ女性が嘲りを込めて呟く。

「よし、俺はあの斧野郎を潰すからお前等あの剣やってくれ」

「解りました！ お父様！」

「：了解。行くわよ、マリア」

宝玉を携えた女性が、言霊を紡ぐ。

「焰皇ガルシアスの僕たる焰の精よ、その怒りの業火を以て、かの罪深き者を裁く剣を創り出さん！」

言霊の力により現れた灼熱の炎は、少女の構える剣へと進み、その刀身を包む。

草食動物は、至近距離で肉食動物に出会うと、恐怖と絶望感により身体が動かなくなるといふ。

今正に三人のセスカ兵は、その状況に出くわしてしまい、身動きが取れなくなってしまった。

「食らえ！ 女の敵！」

少女の気合と共に振られる焰を纏った剣は、身動きが出来ぬ男達の鎧を焼き、その身を両断した。

「オラオラオラ！ 手前らは自分より非力な嬢ちゃん相手にしか出来ねえのか！」

いつの間にやら人間の身長ほどもある巨大な剣を握ったキンカラが、斧を持った男と格闘している。

斧を持った男はかなりの手練なのだろう、巨大な剣から繰り出される斬撃を斧で何とか捌いている。

しかし片手を失った代償は大きい。徐々に捌ききれなくなり、手に持った斧を弾き飛ばされてしまった。

尻餅を付く格好で座り込む斧兵の喉元に、長大な剣の切っ先を突きつける。

「わ、悪かった。お願いだ。もうしないから許してくれ！」

無様に命乞いをするセスカ兵。

「ん〜？ なんだってえ？ おう、どうするよシヴァ？」

キンカラは答えを求める様に宝玉を持った女性の方を向く。

「私が決めることではありませんわ、あなた。此処はクリスに聞くものでしょう？」

シヴァと呼ばれた女性が、何食わぬ顔で言う。

「お母様！ そんな甘い事を！ クリス様はあと少しで酷い目に遭うところだったのですよ？」

「それはそうだけど、飽くまで本人に決めてもらわなくては。どうする？ クリス」

マリアから受け取った布を胸元に巻き、皇子を抱いているクリスに答えを促す。

「シヴァ様：そうですね。キンカラ殿、ご自由をお願い致します」

「おっしゃ任せい！ 女性陣と皇子殿はあっち向いてな。かなり血生臭くなるからよ」

と、悪魔の笑みを浮かべてキンカラが言う。

その笑みを浮かべた先には、先程の下衆な表情とは打って変わって恐怖におののいた斧兵の姿があった。

「ひいっ。や、やめてください！」

「んー？ お前等クリス嬢に何してたのかなー？ 一思いにやられるのと、じっくりたっぷりに苦しむのと、どっちが良い？」

次の瞬間、この世のものとは思えぬ絶叫が森の中を突き抜けた。

「そういえばシヴァ様、なぜ此処に？」

「あらお言葉ね。あなた達の部下の若い騎士が私たちの家に息も絶え絶えに入ってきたわけ。治療が終わったらいきなりあなた達の事言い始めて、探してたのそしたら馬の啼き声を聞いた訳」

訳もないように言うシヴァ。

「その啼き声の元へ行ってみたら、クリス様があんな目にあってる所を発見したんです！」

マリアが言葉を次ぐ。

クリスよりも二、三歳下であろうか、汚れを知らぬ純粋な瞳に涙を含ませて言った。

「そう。有難うマリア。心配を掛けちゃったわね」

慈しむ様な微笑みを讃えながら、礼を述べる。

「なあ、クリス嬢。レオン殿は何処だい？」

全身を血で深紅に染めたキンカラが尋ねる。

「兄上ですか？　そういえば…まさか、一人であの大勢を？」

「何処だ？　ちよつとヤバいなそいつぁ。俺は援護してくるから、

お前等先にクラウドスに戻ってろ」

「たしか、この辺りから真直ぐに西へ向かった先だと思います。…

キンカラ殿、兄をお願いします」

縋るような目でキンカラに懇願した。

「大丈夫だ、レオン殿はしっかり助けるからな。安心して待ってろ」

そう言い残すと、キンカラは大弓と大剣を背負って森の奥深くへ

駆け出した。

「さて、私達は先に戻りましょうか。うちの王様にも報告しないと
いけないし。皇子様の謁見はレオン君が帰ってきてからでも良いで
しょう」

「そうですね、お母様。エアリーズ様もクリス様も疲れているよう
ですし、今日はぐっすり休みましょう」

シヴァはクリスからエアリーズを受け取り、クラウドスへと歩いて
いく。

「シヴァ様、キンカラ殿は大丈夫でしょうか？」

少し不安になって、クリスが聞いた。

シヴァはクリスの方を向き、笑ってみせた。

「大丈夫よ。紅の勇者。それがあの人の通り名だもの」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7743a/>

カルミナ帝国大戦記

2010年10月28日04時34分発行